

# ねこの みこの

猫穀通徳

第 3 4 号

平成十一年

(1999)

1月15日発行

(年4回発行)

## 発句の挨拶

東 明雅

なに波津にあし火焼家はすすけたれど  
炭賣のおのがつまこそ黒からめ 重五

これは「冬の日」五歌仙の一つ、第四番目の「炭賣」の巻の発句である。前書は「万葉集」(巻十一)作者不明の歌「難波人葦火焼く屋の煤してあれど己が妻こそ常めずらしき」によっている。それを含めて一句を解釈してみると、「難波の浦で葦火を焚いて暮らす貧家の女は、煤けて色が黒いけれども、自分の妻と思えば、常に新鮮で愛すべき女性であるという古歌があるが、炭賣のお前の妻も嘸かし真っ黒だろう。しかしそれでもそなたの為には最愛のよい女房に違いない」という事になる。

この発句の解には異説もあるようだけれども、私が問題にするのは、この句の意味、あるいは表現でなく、挨拶の問題である。

「冬の日」の第一巻、「狂句こがらし」の巻の発句は有名な芭蕉の「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」で、初めて参会した名古屋の一座、ことにおそらく亭主であった野水に対して、自己紹介をかねた挨拶が十分すぎるほど完璧になされておき、野水も亭主としてはっきり「たそやとばしるかさの山茶花」と挨拶を返している。

第二巻の「はつ雪」の巻において、野水が発句「はつ雪のことしも袴きてかへる」と詠んでいるのは、「世を通れたいと思うけれども、まだそれも叶わず、折角、初雪が降ってもゆっくり雪見のいとまもないまま、今年も窮屈な袴をはいて外出先から帰って来ることだ」という意味であり、第一巻の風狂に徹した芭蕉の挨拶に対して、「私はまだ到底そこまでは到る事が出来ません、お恥ずかしいことです」と、芭蕉に対しての挨拶である。脇の杜国も「霜にまだ見る 薺の食」と付けて、「いや、私もご同様、霜のころまで咲残った朝顔を眺めながら、朝食をかきこむ佻しい身の上です」と、野水と同じような俗務の忙しい身を歎いて挨拶を返している。

次に第三巻、「三冊子」によれば、「雪月花の事のみ云たる句にても、挨拶の心なりとの教也」とある。折からの変わりやすい空模様を擬人的に表現した杜国の発句「つ、みかねて月とり落す 霽かな」は、このような天気候よくお集り下さいました」の意もあるでろう。そして、これを受けた重五の脇「こほりふみ行水のいなづま」は、陰晴定めない時雨に対して、瞬時に変化する稲妻を照応させ、一応の挨拶としている。

次に、順序を飛ばして、第五番目の「霜月の巻」から見ることしよう。「霜月や鶴のイタならびるて 荷兮」は、前書に「田家眺望」とある通り、眼前囁目の句である。鶴の並んでいるのを暗に一座の連衆が並んでいるのに比喩したという註などもあるが、それは考え過ぎであろう。田家の眺望をそのまま挨拶としたものであり、これに付けた芭蕉の脇「冬の朝日のはれなりけり」も、発句とつないで一首の和歌のように仕立てた所に挨拶がある。

ところで、問題の四番目に出てくる炭賣とは何者であろうか。もちろん当日、重五が町でふと囁目した可能性も全くないわけではないが、それでは挨拶はどこにあるというのであろう。私はこの炭賣は白楽天の新樂府の一首「賣炭翁」をモデルとして作り上げた重五の戯画像であると思う。芭蕉がこの第一巻で、自らを藪医師竹斎にたとえ、木枯にふかれ吟遊する身を戯画化して一同に挨拶したのに習い、富裕な木材商の身を、「薪を伐り炭を焼く南山の中、満面の塵灰煙火の色」と貧に苦しむ「賣炭翁」に擬して、芭蕉に自己紹介の挨拶を返したものであると思う。色の黒い妻を出したのは俳諧のたわむれである。

新年明けまして

お目出度うございます

歳旦三つ物

猫養会主宰 東 明雅

屠蘇酌むや干支の兎も七廻り

揺れて賑やか餅花の色

宇宙船青空遙か飛び行きて

平成十一年一月元旦

(一九九九年)

桃徑庵 式田 和子

正月の顔いささかの紅ひかむ

雪の兎をのせる塗盆

いなだごち十二神将寄り合ひて

久慈庵 市野沢 弘子

初刷の「点」四号の届ききて

鏡開にはつむ声々

月を浴び白き鞆漕ぐならん

房達庵 内田 麻子

めぐり来る卯年わが年屠蘇酌まん

雪の初富士蒼浪の上

小絞鶏の声賑はしく牌打ちて

梅香庵 副島 久美子

ふんはりと富士に笠雲初景色

恵方目指して一筋の道

エコロジーメール交換頻繁に

梓庵 中川 哲

淑気満つ独座泰然 MERCY CLEAN

稲穂の餅に照るやはなやぎ

三下りめく路地通りのどやかに

涼月庵 中田 あかり

ぼっぺんや生ひ先見ゆる赤き頬

祝太郎が絵本読心頃

正東風吹き世紀の移り告ぐるらん

唐猫庵 大窪 瑞枝

名を賜ふいふせき庵や初菴

手鞠転ばせ遊ぶ唐猫

この星の花見尽くさん天駆けて

卯遊庵 蒲原 志げ子

一巡り自然の無事へ御慶かな

二兎追ひ三兎得たり初夢

フルムーン四の五言はせず花浴びて

冬霞庵 上月 淳子

書初や紙をはみ出す勢ひに

破魔矢を受けて渡る反橋

磯遊び時々母を目で追ひて

袖菊亭 豊田 好敏

ポケモンのピカチュウ踊る御慶かな

スリーナイン  
999を期する初夢

梅桜松の花まで咲きだして

臥猫庵 原田 千町

去年今年浮世の定めあるがまま

笑ひころがり双六の賽

たたなづく花の様雲蒼天に

## 俳句の歩み

徳富喜代子

(有季定型俳句協会)

有季定型俳句協会が設立された直後、アメリカの俳句を正しい方向に導くには季語を選んで普及しなければと考え、先ず日本語のわかる我々が日本語の歳時記から、アメリカ人にも理解出来ると思うものを選びだすことにした。その後それらの英訳にとりかかり、季節別に、そしてアルファベットの順に並べ、天文、人事、植物、動物などの区別は、日本の歳時記にならって並べ、数頁の季語リストが出来上がった。「季語」は英訳しなくても、K I G Oで通そうと決め、次の集会で会員に披露した。有季定型、という考えはとても強く意識している会員なので、K I G Oリストは大喜びで受け入れられた。

それにしても、この俳句活動の初めに逢った、サンノゼ市の図書館長の話は、西洋人の自然観と東洋人のそれとの違いがはっきりして一驚した。ブライスの著書を全巻入手して読んでいた人だったが、私たちに話されたのは、西洋では先ず人間が自然をどの位征服出来るかに価値を求めるといふ生き方をして来た。従って、花などは鉢に植えて窓の所に並べて眺めるといふのが西洋人の考え方であった、とのこと。そう言えば絵葉書などで、窓辺が一杯の様子をよく見たなと思った。東洋人の自然は、ふところにもぐり込める母の

ような感じであるのに比べて何とまあ、とつづく驚いた。

でも俳句を始めた人達は、よく本を読み我々の話に耳を傾け、自然を見て句想を得るといふ方法をすぐ会得しているのを見て、とても嬉しかった。

ある会合で、その地方独特の季語も見つけられる、例えばカリフォルニア・パピーなどがそれ、と話した時、一人の青年がすっと立ち、自分はそのパピーを一度も見事がないから今から探してくる、と言って外へ出て行った事があった。彼にとつて生まれて初めての自然観察の機会が訪れたというわけである。

しばらくすると、パトリシア・マクミラーという会員が、枝々の組んづほぐれつ梅の花、という句を作った。梅の古木が枝を曲げて、あちこちに伸びている様がよくわかり、よく見ていると感心した。この人はそれ以来約二十年間、立派な句を作りつづけて、会のリーダーとなつてゐる。

モントレー湾の側に夏の家を持っており、砂浜に降りて、鳥の様子、貝の種類などを観察しそれらを四季にわけた季語リストが出来ている。それには海岸に生える植物も含まれており、北カリフォルニアの海辺の事を知るには貴重な一冊となつてゐる。

会員の一人が日本に行つて蝉時雨を聞いたと、日本在住の英語俳句作家の神田惣介氏に聞いた。こちらではシカダという蝉の名はあ

るが、蝉時雨は季語リストにのせる事は出来なかつた。おそらく蝉時雨の経験者は一人もなからうと想像されるからである。それと広大な土地の西と東、北と南は気候など大いに差があり、雪深く寒い地方は、球根の発芽などは六月だったりするので、春らしくなるのはどこか外の地方の夏ということになる。

それで月別の分け方をやめ、春夏秋冬はどこでも遅かれ早かれ巡つて来るから、自分の春の句は外の土地の春となると考えた。

季語を知らずに作句する人はよく三つも四つも使うので、季語は俳句の小さな窓で、その季節が見えるようになってゐる、だから、一つの句に春の窓と秋の窓があれば一体どちらを見るのかとても不都合となる、と説明した。それ以来、季重りは有季定型の会員は作らなくなつてゐる。

アメリカ俳句協会の人達もよく集まつて作句しているけれど、雪、白、というのが受賞作品と聞いた時は驚いた。ただ一語、鮫、と書いてハイクと称している人もある。

とにかくすっかり有季定型になじんだ会員が着々と数を増し、今では日本、カナダ、ドイツ、オーストラリアなどにも会員が出来ており、本当に喜ばしい事と思つてゐる。

二十年前に、英語を話す人達も俳句は理解出来、楽しむと思う、と言つて俳句をひろめ始めた亡き主人の考えが正しかったことを感じながらペンをおくこととする。

川名将義

平成五年三月一日、早朝の羽田空港出発ロビー、七番時計前。その人との待合せ場所である。私が到着して間もなく現れたその人の風貌と立ち居振舞は、往年は楚楚とした美人であったに違いないと思わせるものだった。だがしかし、少し前に大病をされたと聞いている細身の体は、今にもポキリと音を立てて折れそうであった。これで鹿児島での講演会が無事開催できるのだろうか、心の内に不安が広がるばかり。その不安を悟られないように必死で表情を繕う私。

これが式田和子先生と私の出会いのシーンであった。そんなこんなで、とにかく講演会場である鹿児島市の山形屋文化ホールに到着。超満員の聴衆を前にして、先生が講演を始められた。するとなんと第一声から大音を張り上げ、七十分の講演を一気に話し終えてしまわれたのだった。その肝っ玉に私の不安は吹っ飛び、ただただ驚くばかりであった。

講演会は当然大成功で、これに気を良くした私は、先生に「忘八」と罵られながら、その後二年間に札幌から沖縄まで二十本以上の講演をお願いしてしまったのだった。

この「忘八」というのは、仁・義・礼・智・信など、人間として備えておくべき八つ

事柄を、すべて忘れたというようなことなのだが、考えてみると、いくらご著書『死ぬまでになすべきこと』を売伸ばすためとは言え、病み上がりの高齢者の尻を叩くようにして、

月間二カ所以上の出張講演をお願いし、その上、御自宅にご著書を送りつけて半日掛りで何百冊も本にサインをしていただく作業を、付きっきりでお願いすること数度。この非情(?)ぶりは立派に「忘八」であったようだ。

そうした先生との講演会道中の道すがら、「連句」という文芸の面白さ、それに注ぐ先生の情熱などを時々伺うようになった。社会に出てからは、仕事以外のことと言え、ゴルフ、カラオケ、酒、競馬と数十年の文弱状態が続いていた私にとって、「連句」という言葉が新鮮な響きを持って胸を打った。そしてこの未知なるものと遭遇してみたいという願望が日に日に強くなっていった。

念願が叶い昨年、奇しくも式田先生と出会った時と同じ三月から、先生に手ほどきしていただいたのが、「連句」と私の出会いであった。

この「連句」に出会ったことから、東明雅先生にもお会いすることができ、また、楽しい連衆の方々との数々の出会いがあり、さらに新しい知識、知らなかった言葉と出会うという、幸せな日々が続いた平成十年であった。これからも、月並ではあるが一期一会を念頭に、出会いを大切に行きたい。

《短句拝見》

茹でし卵を立ててみる春

慎二

(「翁の忌」平成九年)

立春の日に卵が立つという話は、マスコミも巻きこみちよっとした国際的話題になり、中谷宇吉郎博士まで解明にのりだした様子が『卵を割らなければオムレツはできない』(明坂英二著)という本に紹介されている。

この時の卵は勿論生卵なのだが、それならば茹で卵にしたらどうなのだろう、という疑問も湧いてくる。そんな賑やかなやりとりさえ聞こえてくる、あかるい春の句。

以前明雅先生のお宅にお邪魔した折、どんなきっかけだったか、みんな卵を立てはじめたことがあった。練習の結果、明雅先生が3秒で立てられたのが印象に残っている。ちなみにその日は立春ではなかった。(ほ)



第十九回俳諧芭蕉忌正式俳諧

次第 役割

|    |        |           |
|----|--------|-----------|
| 一  | 席改め    |           |
| 二  | 席入り    | 宗匠 市野沢弘子  |
| 三  | 配硯     | 副宗匠 上月 淳子 |
| 四  | 献花     | 執筆 梅田 利子  |
| 五  | 執筆呼び出し | 知司 高橋 豊美  |
| 六  | 文台捌き   | 副知司 八代 嫺  |
| 七  | 俳諧興行   | 座配 田村 満子  |
| 八  | 花前     | 花司 久保田庸子  |
| 九  | 献香     | 香元 橘 文子   |
| 十  | 花の句披露  | 配硯 松本 碧   |
| 十一 | 端作り    | 山口 美恵     |
| 十二 | 吟声     | 本田 弥生     |
| 十三 | 文台返し   | 老長 中田あかり  |
| 十四 | 作品奉納   |           |
| 十五 | 納硯     |           |
| 十六 | 挨拶     |           |
| 十七 | 退席     |           |

平成十年十月二十一日  
於 江東区芭蕉記念館

正式俳諧 脇起り二十韻

二十韻「けふばかり」

|                  |     |
|------------------|-----|
| けふばかり人も年よれ初時雨    | 翁   |
| 咲きてかそけき垣の茶の花     | 明雅  |
| 色刷りの百科事典を愉しみて    | あかり |
| 三世同堂厨賑やか         | 千町  |
| カトマンズ稜線離る月の舟     | 庸子  |
| 徑にこぼるるライマビーンズ    | 満子  |
| 駆落の少年少女西鶴忌       | 淳子  |
| 愛はあっても腹は減るなり     | 豊美  |
| ミサイルの迷ひ迷ひて海の中    | 文子  |
| 損害保険掛け捨てがよし      | 弥生  |
| しゃりしゃりと夏大根を播りおろす | 暁美  |
| 嫦娥搦めし軒の蜘蛛の巣      | 碧   |
| 灯り揺れ佳境に入りぬ妖怪譚    | 嫺   |
| 下戸の口説きは酔うた振りして   | 美恵  |
| 後朝の枕に残る長き髪       | 美津  |
| 列車の響き遠く去り行く      | 慎二  |
| 全校生待ちに待ちたる優勝旗    | ゑみこ |
| 穴を這ひ出し墓に躓き       | 路子  |
| 堀割にひねもす花の散りかかり   | 弘子  |
| 春の息吹に開け放つ倉       | 執筆  |

二十韻「時雨忌」

加藤道子捌

|                  |     |
|------------------|-----|
| 時雨忌や橋のたもとの蕎麦処    | 道子  |
| 籬に白きさざんかの散る      | ゑみこ |
| クロスワードあと一文字を残しめて | 紀子  |
| 小さな毬が転がって嬰       | 佐紀子 |
| 宵月のひよいと顔出す山の端    | 水壺  |
| 鳩吹く男手招きをする       | 佐   |
| 猨とも畏とも知らずうぶな奴    | 紀   |
| 寝そべりかぞふ節穴のかず     | 佐   |
| モチーフの俄かに浮かぶ抽象画   | 壺   |
| 空から続く長い階段        | 紀   |
| 鱒つけて河童と泳ぐ月の淵     | ゑ   |
| はったいの粉笑っては噎せ     | 同   |
| お隣の団扇太鼓がはたと止み    | 壺   |
| 新婚さんはエアロビクスか     | 紀   |
| 荒馬を馴らし恋はるるセラピスト  | ゑ   |
| 左の指の短いと言ふ        | 紀   |
| もっこすの職人氣質貫きて     | 壺   |
| オレンヂカクテルなぜか大好き   | 佐   |
| 子に借りるハイパーヨーヨー花の蔭 | 紀   |
| 電気自転車春風の坂        | 執筆  |

平成十年十月二十一日 首尾  
於 江東区芭蕉記念館  
連衆 吉村ゑみこ 椿紀子 間佐紀子  
今宮水壺

二十韻「翁の忌」

桑原美津捌

二十韻「海図の海」

五味蓉子捌

二十韻「遊覧船」

権頭和弥捌

野に佇つや雲に声する翁の忌

美津

時雨忌や海図の海に漕ぎ出さん

蓉子

時雨忌や河口に雨の遊覧船

和弥

千里越え来し鶴のひと群

孝子

すなめりくるりちよっとお愛想

和子

橋のたもとに残る木守

和弥

美しき名の地酒ばかりの並ぶらん

美恵

路地の角猫の記憶の香りして

志げ子

大庄屋父子二代の目利きにて

曉巳

リトルリーグに入団の吾子

好敏

幼稚園児は足早に去る

哲

算盤よりは電卓がよし

利子

招待状はらりと開く月の窓

澄子

イエメンの月は赤いといふ便り

千寿子

嶺々の鞍部に月の渡るらん

志世子

夜寒の猫の嫉妬深くて

孝

十日の菊と求愛の返

志

りんごの甘煮好きなあの人

巳

紅茸のやうな唇目の前に

好

ぬくめ酒差しつ差されつそれが夢

和

縫りたる尼僧の指の冷まじく

玲

今度丁なら俺のものなり

孝

スタートラインで何時もつまづく

哲

革の財布のまたもしゃっくり

利

峠ゆく力強さのアプト式

美

永ちゃんのコンサートまで煙草断ち

寿

綻びし防衛庁の防護柵

志

ハイホーハイホー小人七人

同

老人力で鈴のご詠歌

和

サンドアートに婆の挑戦

弥

汗拭いて嘘を消す嘘懺悔室

孝

鳶来て稲荷油揚さらはれる

哲

南仏の月と語らふ籐寝椅子

利

水争をあざ笑ふ月

好

プール洗ひのアルバイト月

志

海芋の白とえにしだの金

巳

ひと先づはバルカン半島休戦す

澄

漆掻やがて賞取る塗師となり

寿

豊穰の女神のお臍くりくりと

玲

座付作者に渡す路

好

出来ちゃった婚告げられし父

同

ししゃも鬮って告げるおめでた

巳

抱擁はいま体臭の海の中

孝

嘘本当嘘と言ひたい実の恋

哲

外したるピアスの涙枕元

志

チャタレー夫人恋のかはゆさ

美

精神科医の訪へぬセラピー

志

英語劇にて送る先輩

玲

薄造り箸につまめば透くやうな

澄

卒業式の袴気遣ひ

和

図書館の羊皮紙本に夕映えす

巳

春の展示の変る呉服屋

津

けふあした眠り忘れし花の山

蓉

漫画の文字のをどる苗札

同

尺八と琴に合はせて花の雨

美

黄塵万里故郷の方

哲

少年へ少女ら喚ぶ花の丘

同

蝶追ひかけし妹の夢

澄

北へ遙かに春の鴨立つ

寿

利

平成十年十月二十一日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 坂本孝子 山口美恵 豊田好敏

八角澄子

平成十年十月二十一日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 式田和子 蒲原志げ子 中川哲

紺野千寿子

平成十年十月二十一日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 日高玲 島村曉巳 梅田利子

秋山志世子



二十韻「時雨の忌」

峯田政志 捌

深川連句

二十韻「曼珠沙華」

東明雅 捌

はや逢へぬ貌のありけり時雨の忌

政志

二十韻「小六月」

東明雅 捌

曼珠沙華異国の友と師の庭に

栗子

池に散りこむ紅葉ふたひら

麻子

小六月浜町河岸の浮鷗

明雅

颯風一過月を待つ宵

明雅

子の好きな厚焼卵仕上げるて

庸子

紅葉散り敷くアスファルト道

靖子

走り蕎麦選集の名を確かめて

イオン

新型ゲーム次々と買ふ

けんのすけ

コンビニのほかほか弁当買ひもして

路子

斑入りの硯新しき筆

郁子

月の夜はヴィオラを掲げて来る牧師

淑代

混成合唱稽古始まる

雅

松代に継ぎしばかりの骨董屋

淑代

男葡萄を皿に盛る指

け

塾帰り子を待ちをれば十三夜

靖

曾祖母様の日記に秘め事

栗

蟻螂が怖いと急にすがり付き

麻

肩抱くふたり隠す夜の霧

路

溢れつぐ泪も甘きローティーン

雅

巴御前に泣きどころあり

け

猿酒に酔へば臉に浮ぶ女

路

これっきりこれっきりこれっきりですか

イオン

大法螺吹きが宇宙酔ひして

代

千年杉のこぼす眩き

靖

黒海の波のやや荒れ夏の果

郁

新発意の写経数巻夏座敷

け

喘ぎゆく4WD高速路

路

葦毛の馬をつなぐ朝焼

代

ヨットを追へば細き夕月

麻

旅芸人の泊るモーテル

雅

恋の歌唱ふひねもす古帽子

栗

長靴を履いたあたしの王子様

代

原宿にくり出すキャスター・ディレクター

靖

降る雪に魔法のお城めきし家

イオン

猫眼鳩胸口説き上手で

庸

茅の輪くぐりの群照らす月

路

鯨肴に熱燗の酒

郁

バツイチもバツニも混じるクラス会

麻

しゃりしゃりと鉋で削る氷水

雅

権禰宜はブルージーンにはきかえて

代

ミュージズ石鹼祖父も好みし

代

人魚の恋の溶けし泡沫

靖

黒澤明の声がまだ耳

栗

故郷が出湯の里となりし夢

志

アリランを夫に捧げる異国妻

路

夢の中信天翁は翼伸し

雅

お白酒などつい飲みすぎす

麻

亡き母の供養にこもる永平寺

靖

笑ひそめたる遠き山々

郁

山を背に野舞台八方花明り

庸

遠き嶺々光る残雪

雅

大使館窓を透かして花と月

イオン

風遠ざかり点となりゆく

け

ゆさゆさと枝をゆらして花大樹

路

雛の調度を取り出す子ら

代

平成十年十月二十一日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 内田麻子 久保田庸子

太田けんのすけ 浅賀淑代

平成十年九月十六日 首尾

於 柏猫養庵

連衆 近藤栗子 イオン・コドレスク

東郁子 浅賀淑代



連句への道(2)

上月 淳子

さて忘れもしない昭和五十八年十一月、恐る恐る今と同じ四十八階の十八番教室へ入っていった。人数も二十名に満たず、家庭的な和気藹々たる感じで一先づ安心、お隣の方と御挨拶などしてすんなり溶け込んでいった。今と同じ様に、半分が講義、後が実作であった。とは云うものの先生の「連句入門」一冊を頼りに飛び込んでいった身には、何が何だかという感じで、とにかく前半の一時間が済み次が実作、それが途中まで出来ている作品に「次を付けなさい、さあ」と短冊を渡されても全くの初心では何と書いて出したか、覚えがない。そして前や横にいらっしやる古参の方にどうしてこれがよくてこれはいけないの等とうるさく質問したものである。

そして先生の御講義は、まことに懇切丁寧で、付心付味等次第に分っては来たが、分れば分つたで難しく、今でもこれには迷ってばかりいる。余談を一つ。七名八体のお話の時、先生が、誰かに質問されたら、大体これに当てはめて答えればいいからとおっしゃったら、どなたかかすかさず「それでは七名八体ではなく七名はったりです」と茶々を入れられ大爆笑。

今まででしていた短歌にしても、俳句にして

も、あくまでも個の文学であり、俳句と連句の発句は形は同じだが、決して同じものではない。翁の「言い得て何かある」で発句は言い切つてはいけけないので、脇を付ける部分を残し、次の人のことを考えねばならない。俳句は写生を主とし、自分の見たもの、感じたものを詠むのが主である。しかし連句はまず一座しての共同作品であるし、それには捌が付句を選んでいくわけで、これが一巻は捌の作品と云われる所以であろう。そして虚実等分というが、暫し、仮空の世界に遊ぶことが出来る。これが俳句と違う連句の魅力である。

その頃は人数も少なく、時々全体を三席位に分け、二時間で半歌仙を巻くこともあった。それで先輩から、出した句を一直して採って頂いたり、これが打越とか実際に則して教えて頂いたのも随分役に立ったと思う。

そして暫くして、捌をやってみなさいと云われ、同期に入った者が先輩方が連衆になつてくださり、捌初体験をすることになった。

始まるまではどうしようかと緊張していたが、いざとなると、度胸が据つて何とか二時間巻き終えた。今にして思えば、連衆の方が気を使つて下さって、何とか巻き上げられるようにして下さったのだと分るが、その時「どうだった？」と聞いて下さった方に「捌って面白いですね」とお返しし、今となっては穴があったら入りたい思いである。

そうこうして私なりに連句の面白さにはまり込み、奥深さが少しずつ分つて来て、本当月二度の教室が待たれる思いで、先生のお話を聞き付句をお送りするのが楽しみであった。

そのうち小さいグループにも誘って頂けるようになり(この会が今も続いている「吉野の会」である)。式目も一応は理解し、これは表には出していけない位のこととは分り、先輩方にも「うまい句が出たね」等声をかけて頂ける様になった。その方々も長い年月の間には鬼籍に入られた方もあり寂しいことである。

それから嬉しかったのは、その頃あった武翁賞に昭和六十一年十月、まだ雛っ子の身で歌仙「白露」が入選したことである。

その後六十二年三月「伝導書」を頂き、やっと此処まで来たかと、身の引き締まる思いであった。

その後、これからもっと深く勉強せねばと思つている時、運悪く大病をし、幸い回復したものの、それから主人が倒れる等のがあった。外出出来る機会が減ってしまったのは仕方ないとしても、気力だけは衰えない様出来るだけ勉強して行きたいと思つている。年を重ねるに従つて、楽しさも増す代り難しいことも多く、これが連句の奥深さである。次は私なりに句作について考えていることを書いてみたい。

英語連句の試み 花鳥風月(8)

浅賀淑代

新玉の年、うさぎの年を迎えました。弱気者に見えてクレバー、悪戯っけもたっぷりな兎の元氣にあやかりたいと思います。

ところで、「玉兎」とは、兎が月に住むという伝説からきた(兎と月の神話は全世界処々にあると聞きます)月の異名ですが、英語ではどう表現するのでしょうか？

以前、深川の連句会で

大空の玉兎と杯を差し合はせ (蘭石)

の句に対して

glasses raised / to the crystal rabbit / in the big sky

という訳(近藤蕉肝/W Jヒギンソン)がなされ、クリスタル・ラビットとは、修辞にかなった、実に響きの美しい訳と感心した覚えがあります。とはいうものの、玉兎を常に the crystal rabbit として固定化してしまうのには疑問があります。

「玉」は、確かに、玉楼・玉座・玉稿などのように美しいもの、優れたもの、貴重なものなどに冠して用いられる語ですが、玉兎の「玉」は、かならずしも美称の冠ではなく、もしかしたら単に月そのものを指すのではないだろうか？また、兎は、ラビットよりも、神話や伝説にもよく登場してくる古くから

野兎／へアー(hare)の方がふさわしくはないだろうか？・そんな疑問も出てきます。かつて某パソコン連句のボードでもそういう論議をしたことがあります。ご紹介したい訳語として、

the Saint Hare in the sky (無耶案)

がありました。少し長めですが、兎を神聖化して格を与え、楽しいですね。皆様もお知恵をお聞かせ下さい。

さて、脇起二十韻「ねこの子」。

ウ5 仕立屋はスリッパまでも縺子シルク イオン

ウ6 豪華客船雪に包まれ クリス

これにハリー・ベストさんの付けです。

ナオー the dancing passengers

do not notice

the oncoming tragedy Harry

(近づける悲劇も知らず踊りみて／碧訳)

ハリーさんは、イギリス人。猫養のお仲間、松本碧さんのお嬢さんのご夫君で、このクリスマス休暇に来日。ご滞在中、碧さんを指南役に付け合いの初体験をして頂きました。豪華客船からタイタニックの連想はごく自然ですね。それもそのはず。ハリーさんの大伯父様はタイタニック惨事の数少ない生き残りのお一人なのだそうです。奇遇ですね。

付けて、

ナオ? 聖母子像に額づくは誰 碧

この句の英語訳、どなたかお願いできればと思えます。では、皆様よろしく。

\* 連句と酒 \*

「吞兵衛様」

蒲原志げ子

明けましてお目出度うございます。愛酒楽酔の三ケ日、一盞、一句の境地如何でございましたか。美味しい酒を呑む為の秘策の数々、この前伺って本当に驚きました。

仕事を完全に済まし、長い午後の間にも絶対間食をせず、水分を摂るのさえ控え(これはいけません、小林秀雄の二の舞になりますから)、只々、日暮れを待つ。

さて、と今日の酒の思案。決まった所で、腹わたに注ぐ一盞。呑むほどに心身の高揚、愁いなく陶酔に心満つる至福。酒呑まぬ奴には解るまい(いいえ、解ります)。

ほとぼる古今東西の詩。亡き友への一盞(これが多すぎます、せめて二三人にして下さい)、我は酔うて眠らんと欲す。なんてサッサとおやすみ。おいてけぼりの私達、あの後辛口の人物評に沸き、楽しい時間を過ごさせて頂きました。内緒です。能登の子の腸少々お裾分け致します。

かしこ

◇猫簞会案内◇

○平成十一年 立机式

日時 二月十七日(水) 正午～午後五時  
場所 KDDホテル ストラータ  
新宿区新宿七二六四〇

○奉納正式俳諧

日時 四月二十五日(日) 一時より  
正式俳諧のあと二十韻興行

場所 亀戸天神社

江東区亀戸三六一

○亀戸天神社 藤浪俳句会

日時 五月九日(日) 十時

場所 亀戸天神社 参集殿

兼題「花」未発表作品二句に会費一千元

を添えてご投句下さい。

二月二十五日必着のこと

席題 当日出題 午後一時締切

会費 一千元

投句先 〒一三六〇〇七一江東区亀戸三一

六一 亀戸天神社「藤浪俳句会」係

撰者 小澤 實

川野 蓼艸

東 明雅

式田 和子

主催 亀戸天神社

香雪居二世小泉漲洋

杉内 徒司

漲洋さんと言葉を交わしたのは都心連句会  
第二作品集『むれ鯨』(昭和四十四・三刊)の  
出版自祝会(同四十四年・五・二四 白金八  
芳園)の席上である。

この道や四十年の風かおる 漲洋  
を発句とする歌仙の前書に「書道奨励会の  
協賛員に推さる」とあるので、「協賛員とは  
なんですか」と聞いたのがきっかけで、連句  
修業の話など伺った。

一度遊びに来よ、と云われたので四十四年  
七月八日の午後、平塚市下島の漲洋さんを訪  
ねたら、家の前に「香雪居」という石柱が建  
っていた。香雪とは梨の花のことと伺った。  
その日先客に神奈川県立博物館の加賀ひろ  
子学芸員がいて、平塚周辺の俳諧について熱  
心に質問されていた。

漲洋の師は香雪居山梨若泉。若泉は大磯の  
鴨立庵十一世大沢壽道門である。

若泉の弟山梨半造は陸軍大将、朝鮮総督。  
総督在任中の昭和四年、総督府に疑獄事件発  
生、やがて満州鉄道疑獄へと拡大。大地主若  
泉は弟のため奔走するところあり、それがた  
め貧乏になったという。

四十六年十一月十四日、平塚市海岸寄りの  
農業会館で開かれた「香雪居二世小泉漲洋翁

喜壽正式俳諧」は私がある目的から思い立っ  
興行したので、私が執筆を勤め、そのため  
何度も香雪居に通い稽古を付けてもらった。

当日は都心連句会の大方の方々にも出席頂  
き事なく終了したものの、私の目指した目的  
は達せられなかった。漲洋さんは地元の政治  
家河野謙三、河野洋平両氏の後援会の有力な  
会員だったが、地元の俳諧結社花月会が割れ  
ていたので、私の企図した叙勲の件は実を結  
べなかった。

漲洋さんの叙勲運動は挫折したが、これが  
今も続いている伊勢原市の洞昌院での「心敬  
忌」を生み出すことになるとは、私も気の付  
く筈もなかった。

昭和四十六年六月七日伊勢原駅バス停で漲  
洋さんと落ち合い、十一月十四日の打ち合わ  
せをする約束だったが、漲洋さんは見えなか  
った。いらいらしながらふと前の伊勢原市観  
光案内看板を見ていると、「心敬塚」の文字  
に気づいた。

それがもつて、昭和四十九年四月二十一日  
の「心敬五百回忌」の前日、漲洋さんの親戚  
の御師の宿「あさだ」に一泊して関係者一同  
で百韻を巻いた。

都心連句会主催五月の大山正式俳諧は今も  
「あさだ」で張行され、「心敬忌」は伊勢原  
連句会により大山山麓洞昌院で毎年四月興行  
されている。

漲洋五十二年十二月三日没、享年八十三歳。

【Q】 連句には旅をしているような感じがありますが、なにか通じるものがあるのでしょうか。

【A】 昔、国立博物館で横山大観の「生々流転」という絵巻物を見た事がありました。

天から降った雨が地に落ちて、長い時間をかけて泉となって噴き出し、流れて溪谷となり、滝となり、淵となり、瀬となって大河に注ぎ、あとは春の野を潤して農人を助け、夏は魚類を育てて漁師を養い、やがて大海に入るまでの行程を、独特の大胆な構図、精緻な筆致、さらに見事な墨の濃淡で描き上げているのを見て感動した事がありました。

これはまさに水の旅を描いて、人間の一生を象徴したもので、この絵の題が「生々流転」と付けられている理由がよく分かりました。

これは絵巻物という、自由に主題のT(時)・P(場所)・O(場合)を変化させながら、しかも、それらをうまくつないで行く、日本独自の絵画の手法であるからこそ成功したものでありましよう。

俳諧(連句)も、一巻の中で自由に主題のT・P・Oを変化させながら、発句から挙句まで続けて行く事ができるのです。俳諧(連句)の主題というもおかしいのですが、これは世態・人情とても広く限定すれば大方の納

を得られるところでしょう。

これに反して、俳句は人生・自然の一瞬・一場面を描写することはできるのですが、人生を総合的に描き上げることができません。俳諧(連句)が絵巻物なら、俳句は一枚のキャンバスに描かれたタブロー(作品)でしょう。

たとえば、芭蕉の捌いた「市中は」の巻(「猿蓑」所収)を読むと、発句は海暑に喘ぐ市井の雑踏から脳では田園に、さらに山間の僻村へと場面が移ってこの間にさまざまな生活を観察できます。ウラに入ると、柔媚な春の句と暗鬱できびしい冬の句が去来し、場所も能登の七尾に飛ぶかと思えば、都あたりの古典的な恋に変わり、さらにわびしい僧と猿曳が秋の月の下に登場します。ナオに入ると雑の句が続いて、貧しい人々の暮らしの相がさまざまに描かれておりますが、その中に草庵生活をしていた隠遁者が、その生活を破棄して漂泊の旅に出るのは、西行などの俳でしよう。ナウは折立から恋句ですが、ここで芭蕉の名句「浮世の果はみな小町なり」が飛び出し、この哀傷の気分もやがて、花の句、挙句のいかにものどらかなうらかな気分で一巻が終ります。

ここまでたどって来れば、誰でも旅をしていろいろの事を見聞・体験したような思いになるのは当然でありましよう。これは全く、一巻の主題がT・P・Oを変化させながら続けて表現される独自の手法によるものです。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

二万円 根津美紗 原田千町

二口 日下悟乃

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫蓑基金

あとがき

○ 徳富さんのお話の、パピーを探しに飛出す若者に、「ますほのすすき」なるものを確かめに雨の中へ走り出た「徒然草」の法師の姿を重ねました。海外のハイク熱には、俳句の原点にふれている喜びが伝わります。

○ スーパーでメジロを衝動買いました。「日本産ではありません」の、証明書、付き。ミカンの筋をアツと飛ばしたりなどやんちゃで、見飽きない。これに、飼猫の野生が目覚めたらしいのには気がもめる。

○ 本年もどうぞ宜しくお願いします。

季刊 「ねこみの通信」第三十四号

発行者 猫蓑連句会

編集人 千一九五 町田市金井6-7-16

100711 佛淵健悟

印刷所 アトリエ・Neko